

がん検診での過剰検出に対する人々の許容度は事前情報により異なる

乳がん、前立腺がん、腸がんのスクリーニングにおける過剰検出（症状がみられず早期死亡を引き起こさないがんをスクリーニングで検出すること）について、一般の人々の許容度を明らかにし、その許容度がスクリーニングから得られる便益や過剰検出されたがんの有害性の大ききさで変化するのかどうかを検討した。

被験者は、英国の代表的な年齢層および性別を選択して 1,000 例がオンラインで集められた。女性被験者には乳がんと腸がんが設定されたシナリオ、男性被験者には前立腺がんと腸がんが設定されたシナリオを用意し、それぞれのがんの疫学、治療、予後に関する情報を説明した。便益に関しては「がん特異的死亡率が 10%減少する」「50%減少する」という 2 つの異なるシナリオを示した。その結果、過剰検出への許容度はシナリオにより大ききなばらつきがあった。許容できるとした症例数が最も少なかったのは「腸がんスクリーニング、死亡率 10%減少」のシナリオで 113 例、最も多かったのは「乳がんスクリーニング、死亡率 50%減少」のシナリオで 313 例であった。全シナリオで許容度は 7~14%にわたっていた。一方、許容できない人の割合は 4~7%にわたり、腸がんスクリーニングに対する許容度が、乳がんおよび前立腺がんよりも有意に低かった。また、50 歳以上の人の過剰検出に対する許容度が有意に低く、教育レベルの高い人ほど許容度が高かった。被験者のうち、過剰検出について耳にしたことのある人は 29%であった。

今回の結果から、がん検診における過剰検出に対する一般の人々の許容度は、死亡率や便益などの事前に与えられる情報によって異なることが示された。スクリーニングの案内時に過剰検出の可能性やその影響についての明確な情報を伝え、人々が情報に基づいた選択ができるようにすべきである。

出典：British Medical Journal. 2015; 350: h980. doi: 10.1136/bmj.h980